

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2010年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学研究科	フランス文学専攻
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科フランス文学専攻 博士後期課程1年	黒木 秀房 印	
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	文学部教授	澤田 直 印	
<b>自然・人文・社会の別</b>	人文	個人・共同の別	個人
<b>研究課題名</b>	ドゥルーズの哲学と文学の読解 - プルースト論を中心に -		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
<b>研究期間</b>	2010	年度	
<b>研究経費</b>	200	千円	

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究ではフランスの哲学者ジル・ドゥルーズと文学の関係を扱った。文学の中でも彼が終始言及をし続けたプルーストの文学との関係を取り上げた。修士論文では彼の著作『プルーストとシーニュ』を研究対象とし、文学作品を前にした時のドゥルーズの態度を明らかにしようと試みたが、本研究ではこの修士論文を補完する形で、研究対象を彼の全著作におけるプルーストへの言及に広げ、彼がプルーストの文学からどのような影響を受けているのかを明らかにしようと試みた。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ドゥルーズ] [プルースト] [スタイル]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

## 1、 先行研究と研究の目的

よく知られているように、ドゥルーズの差異の理論は潜在性 *virtualité* とその現働化 *actualisation* による一連の議論によって支えられている。ドゥルーズの同時代の哲学者でもあるアラン・バディウはドゥルーズの哲学における潜在性の重要性を指摘しながらも、潜在的なものの中にドゥルーズの批判する超越性が維持されていると指摘している。さらには、ジャン・リュック・ナンシーはこの潜在性の概念を英語の意味におけるヴァーチャル(仮想)として捉えながら、やはりこの潜在性という概念を重要視していた。このように、ドゥルーズ哲学における「潜在性」概念が最重要概念であることは疑いを得ないが、本研究はむしろ「現働化」を注視する視座に立つ。先述したような読解はドゥルーズ哲学を潜在的な「脱世界化」の哲学と見なすのに対して、哲学の外と出会うことによって哲学それ自身を哲学の外へと至らせるドゥルーズ哲学の一側面を強調するためである。

## 2、 研究対象

前期ドゥルーズ哲学が哲学史研究の時代であったとはいえ、彼の哲学は絶えず哲学の外との関わりの中で生成されてきたといっても過言ではない。とりわけ、文学の比重は大きく、その中でもプルーストの文学への愛着は並々ならぬものであった。実際、プルーストの文学について書かれた『プルーストとシーニュ』(*Proust et les signes*, Paris, PUF, 1<sup>éd.</sup>, 1964 ; 2<sup>éd.</sup>, 1970 ; 3<sup>éd.</sup>, 1976.) は二度に渡って増補・改訂されているのみならず、彼の著作群の至る所でプルーストに対する言及が散見されることからその重要性を伺うことができる。したがって、本研究ではドゥルーズの哲学とプルーストの文学の関係について扱った。

## 3、 研究の方法と問題

ただし、哲学と文学の差異を十分に考慮するため、ドゥルーズの理論の例示としてプルーストの文学を利用するのでも、プルーストの文学とドゥルーズの哲学の類似を指摘するのでもない方法を探らなければならなかった。なぜならば、ドゥルーズの哲学は何よりも差異そのものに細心の注意を払った哲学であり、哲学と文学のどちらか一方をもう一方に従属させるような形で行う研究はドゥルーズ哲学そのものに反しているといえるからである。本研究の視座に立ち戻るならば、哲学と文学の出会いの場で問われるべきことは、ドゥルーズがしばしば哲学の本領として規定する「概念創造」に文学がいかに寄与しているのかという点についてではなく、現働化の運動としていかに哲学が文学を通して自己に対して差異化しているのかという点についてである。このような差異化は概念ではなく、概念の対象の生産である。「シーニュの生産の理論」について書かれたものでもあった『プルーストとシーニュ』において、いかにして哲学が自己に対して差異化していったのかを明らかにしなければならなかった。

## 4、 具体的成果

そこで、『プルーストとシーニュ』を新たな哲学的スタイル *style* の構築の場として捉える事で、哲学が自己に対して差異化する運動を素描しようと試みた。事実、ドゥルーズは哲学におけるスタイルの変革の必要性を訴えており、「美しい書物はどれも一種の外国語で書かれている」というスタイル(文体)の定義をプルーストに求めていた。『プルーストとシーニュ』で扱われているシーニュ *signe* といった概念の分析、それからプルーストにおけるシーニュの理論との比較研究ではなく、ドゥルーズのエクリチュールの実践の分析を通して、どのようにして哲学の自己に対する差異化が行われ、どのようにして読者に対する概念の効果が生産されるのかを考察した。その結果、『プルーストとシーニュ』で実践されているスタイルは、その後『差異と反復』で言明されることになる「推理小説

**研究成果の概要 つづき**

的スタイル」と「サイエンス・フィクション的スタイル」という二つの側面が見られるということが明らかになった。「推理小説的スタイル」として云わんとしていることは、これまで哲学において支配的であった「～とは何か」という問いの形式を廃止し、「～は何からなるのか」あるいは「～するのは何か」といった問いを立てることにある。具体的には『失われた時を求めて』の統一性は何からなるのか」あるいは、「作品の統一性を成すのは何か」といったものである。これはドゥルーズの存在論が生成 *devenir* の存在論であり、*être* とは別の仕方では考えられた存在論であったことに起因する。また、その一方で「サイエンス・フィクション的スタイル」として云わんとしていることは、哲学の理論の枠組みを構築してそれを文学作品に当てはめるような「前持った知の使用」ではなく、しかしそれにも関わらず、書かれたものにある一貫性を与えるようなものである。実際、『プルーストとシーニュ』はドゥルーズのシーニュの論理が示され、プルーストの作品においていかにその理論が当てはまっているのかを証明するようなスタイルではなく、プルーストの作品をシーニュに関する物語であるという仮定を提示し、プルースト作品の内的動因のシステムを探るための実験としてのスタイルが採られている。『プルーストとシーニュ』という本自体が、新たに一冊の本を書き上げるのではなく、一冊の本に接ぎ木されていくというように増幅していったこともこのようなスタイルを採ったからであるといえる。このようなスタイルの二側面は、新たな概念の生産の装置として機能している一方で、読者に対する概念の効果、思考を強制する効果を産み出す装置としても機能していると言える。

この研究の成果の一部は論文（「ドゥルーズ『プルーストとシーニュ』におけるスタイル」）としてまとめた。

**5、 今後の計画**

しかし、ドゥルーズ哲学の理論的側面において潜在性の概念のみならず、現働化の側面も強調されるようになるのはドゥルーズ後期、とりわけ『襞』(*Le pli*, Paris, PUF, 1988)においてであるように思われる。『襞』においては潜在的なものと現働的なものの二つの方向が、襞を「折り畳む」、「折り開く」という二つの操作的な機能に関わるからである。本研究はいわば、この襞の折り開き＝説明 *ex-plication* の一つのケース・スタディとして位置づけられるだろう。したがって、博士論文執筆に向けて、今後はこの『襞』を中心に研究を行い、「襞」概念の概要ならびに変遷を示すとともに、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、フーコーの「襞」概念との比較研究を行っていきたい。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

なし